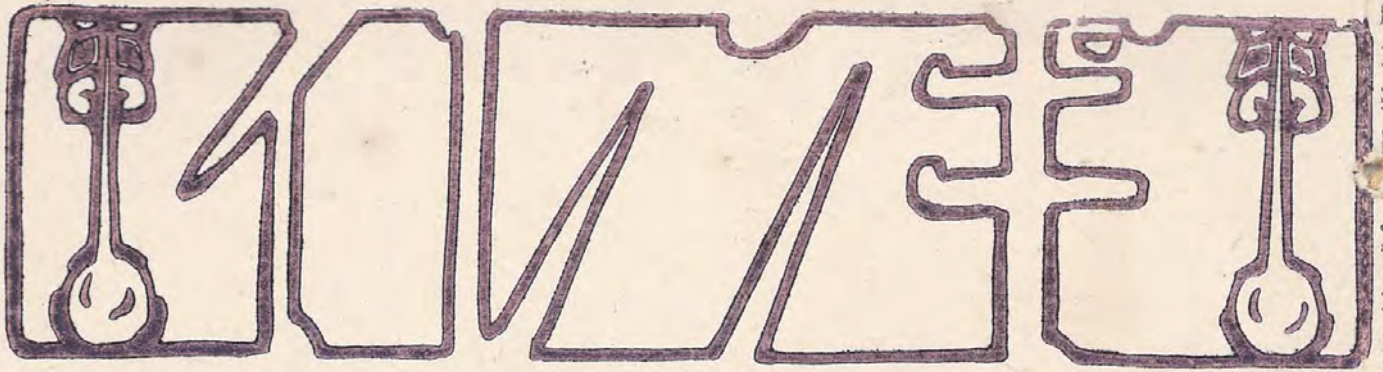


明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可  
銀鈴第拾四號（每月一回二十日發行）

明治三十九年七月二十七日發行



號四拾第

銀鈴第拾四號掲載目次

禁 轉 載

|                   |         |               |          |
|-------------------|---------|---------------|----------|
| 懸想の卷(短詩).....     | 牧岡けい子   | 初夏晚春(俳句)..... | 龜城吟社     |
| 春圃雜筆(雜文).....     | 千代延春圃   | 伯水會(俳句).....  | 五香等      |
| 龍媛の賦(長詩).....     | 増野三郎    | 水馬會(俳句).....  | 富田五香     |
| 夜半物語(小説).....     | はつなつ人   | 夏             | (俳句) 松葉等 |
| そよ風(短詩).....      | 森脇桃村等   | 寄せ柱(雜文).....  | 銀鈴社同人    |
| 作歌談片(評論).....     | 袖 影     | 編輯だより         |          |
| 豊旗雲(短詩).....      | 河野翠激    | 寄贈新刊          |          |
| 簾障子(短詩).....      | 松出まつば等  | 控え帳(雜文).....  | 記 者      |
| 新聞紙を讀む心得(雜文)..... | 李 村 廣 告 |               |          |

銀 鈴

第拾四號

明治三十九年  
七月貳拾七日發行

懸 想 の 卷

牧岡けい子

忽然とわれあり切に戀ひぬれば魂は東に紅の環なして  
 あこがれは羅馬の花を一めぐり流離の國に霜柱しぬ  
 楠木の薫り吹きこす南風に吹かれ思ひぬ君が在る里  
 乳兒だくにふさはぬほどのわか妻が質素を好みの六月の風  
 あやうげに露の玉ゆる甘藷畑を心急ぎぬ物怖ぢつゝも  
 大巷魔の横行し亂調の樂なりごよむ君見しきはに  
 發電のふしぎに怖ぢし土蠻とも申せ挫折し子故知らざれば

◎ 山かつら

山かつらといふのは、山の端に棚曳いて居る雲の事をいふのである。かつらは頭の鬘なのだ。之は古代裝飾の一つである。彼の有名なる其角の句に「明星や櫻定めぬ山かつら」といつて居るが、此意は、山のかつららしう、雲が鬘懸いて居る爲めに櫻が列然とわからぬ、雲も櫻もホーツとして居る、其上に明星がピカリ光つて、いかにも静かな春の曙の景色が彷彿して居る、こは枕草紙なる「春は曙やうく白くなり行く山際少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」といへるも思ひ出られる。

此句に就て一條の物語がある。其角は芭蕉の門人なのだが、何分、芭蕉は幽遠なる詩趣を好み、其角は之に反して、放逸な句を吐き、芭蕉は消極的趣味を有し、其角は積極的趣味を尚び、常に酒を嗜んで、奔放豪邁の句を吐きつゝあつたが、或時其角も酒の醒める時があるといつたといふ事が傳つて居る。斯程迄に、趣味を異にした兩人が師弟の關係を有して居たといふのは

きて見つ寢て見つの句寺に、英名を揮して、後人の口に會灸して居る彼の加賀の千代女が盧元坊の宿屋へ行つて、弟子入をせんとした時、然れならば時鳥の題で何か詠んで見ろといはれたので、色々作つて見たけれど、其、何うも好い句がないといつて撥ねつけた、其中いつの間にか盧元坊は寢入つてしまつて、やがて夜もあけた時に「時鳥々々とてあけにけり」といふ句を出した、すると、盧元坊はまだお前は起きて居たのかといつて其句を見、ふ、これならいゝ、秀逸だ、といつたといふ話があるが、之は恐くは、涼元句「時鳥々々とて寢入りけり」いふより、附會した作話なのであろう。

◎ 蓼太の句と支那人の詩

有名な蓼太の句に「五月雨やある夜ひそかに松の月」といふのがある。一寸意を解して見たなら、終日終夜連夫の梅雨に、物には微菌が生え、陰雲濛々として、濕氣多い、嫌々な氣のする、さりとて、外へ出づれもしないの、家にたれこめて居ると、或晩不圖庭を見るに、雨は、ぼつそりと何時の間にか止んで、松に月が出て居た、それが如何にも、内緒で、ソツと人に知

一つの奇觀である、が、之れで芭蕉の人を容るゝに客ならざりし事も理かる、實は此句を見て、芭蕉は最初余り感服しなかつたのであるが、自身吉野に詣でて、此句ソツクリの景を見初めて、此句の凡ならざるを知、それよりして互に親をなしたといふことである。

◎ 去來と許六

許六の句に「卯の花に月毛の駒の夜かげかな」といふがある、土佐繪に見る様な、艶麗な句である、處が、去來が實は前かゝ此様な思想を有して居たのだが、何分句とするに困つて居た、或は「有明の月にのりこむ」とまで作つたが、何うも其後がうまく出来ない、それで下を「月毛駒」と付けて見たけれど、まだいけない、今度は「葦毛駒」とやつて見た、まだ悪いといふ様な次第で、終に此句を棄てゝしまつた。其後見ると、許六が同趣問のもとに「卯の花に月毛の駒の夜明かな」と何の苦もなく、すく／＼とやつてのけたので、いよ／＼自分は短才であると、自由したといふことである。

◎ 千代が時鳥の句

「朝顔に釣瓶取られて貰ひ水」其他蜻蛉釣りの句、起れない様に出て居たのを、不圖見付だした、それを、密かにこやつてのけたので非常に深い意味を感せしめる此數文字が此句の生命といつてもいゝ位だ。之を、蓼太の門人が長崎に居た或る支那人に見せた處が、支那先生非常に感服した、さうして書を蓼太に寄せて、貴下は實にユライと賞賛した、そして此句を書き自譯して居る、それは、長夏草堂寂。連宵聽雨眠。何時懸月色。松影落庭前。といふ五言絶句で、譯して見たものゝ逆も貴下のご作とは比べ物にならぬと賞賛して居る。支那人が俳句を解し味つた事は珍しい事なので、此事は名い話となつて居る。

龍媛の賦

増野三郎

金矢射ぬける大海の  
波もりうごく壯觀や  
樂あざそかに遠鳴れば、  
海の巨扉をおしひらき

藻の花かざし龍媛は

「天つ日の神來ましぬ」と

手どり舞ふなり波の穂に。

みよあけぼのの殿の巻

うす紫の霽こめて

太古の吹息花やぎぬ

渦雲わきぬ直馳に。

鷗なくなり荒潮に。

たかくさかまく大濤の

れごれるさまに狂ひては

とどろ振はす八潮路也

破壊の呪なりや鳴りごよみ

海の忿怒を現すとさき、

ほほどうち笑みたつひめは

飛沫あびつつまぼるしと

浮き來りまた夢と消也

夕湧きいする瑠璃の雲

異形變化とつどいては

穹門の城きづきたり。

「紫金のみ扉に侍らん」と

金龍に乗る奇し媛は、

花藻玉藻を華鬘として

しづしづまゐる沖つ方。

れん伴もりし鷗どり

光みなざる銀鏈に

双々翼色映ゆる。

海松の林に尾嬉ふる

鯛やひらめのうまし夢、

波にいざよふ藻がくれの

白鳥の脊に白々と

月はてらしぬ。こころ酔ひ

霧にまかれてたつひめは

あくがれ出でし幽宮

たもげの篋篋よ奇し靈韻

海の神秘をほこりがに、

星燦として輝やけり

夜半物語

はつなつびと

「ああ！」

と云つて葛城眞之助は、その身が學生であり、許嫁あ

る身であることを打忘れた。

「眞之助さん、嬉しいねえ。」

清しい目を振り仰いで、さえずりはじつと眞之助を。

妖艶花を欺むくばかり、覆郁として幻に香ふ風情は、

頸のあたり、黒髪にも、胸にもこぼるる氣勢である。

「さえずさん、僕は本統に意入地がないなあ。」

「なぜ？でも決心して下すつたんぢやなくつて。」

「だからさ。」母にも、姉にも、思ある人にも、わ

れから背いて、假令やさしい美しくしい、さえずりのよろ

こびを贏ち得るども、それで快男子葛城眞之助と云は

れるか。いつそひと思ひに父の後を、とも思つたが、

臆、伏ないさえずりはわがために、輝やく黄金の榮えも

、廟堂に立てる思はれびとをも、美事捨て了つて、未

來の成功も覺束ない眞之助——我を一生輔けて連れ添

はうといふのではないか。

「さえずさん、分れやしないよ生涯ねえ。」

「ええ、斯うして眞之助さん。」

わが身も我が心も、任せてこそと、眞之助の胸のあた

り、よくと計りに泣き沈んだ。

いざよひの月、空に、白銀の波はちら／＼と二人を單

めて、太古のやう、静かに又嚴かに夜は更けた。(完)

うよ風

森脇桃村

み瞳は天降りし華星の煙めきか森の古沼に葦葉摘む君

此二人篋篋とる神の傍らに玉の環なせる花と咲きなば

初夏や藻の花かほる水樓に青簾して風めでたまへ

小川 壺月

藻のかほり月の白きに帆立貝遠き島邊へ我等のせめけ

野の朝千華の露を奇し玉と愛つつまろべ露こむる日に

後藤孤星

み佛の生れます朝と菩提樹の白花さくに似たる吾が胸

あさあけや蓮池をめぐる伶人のみ髪より吹く初夏の風

人と行く小路の宵や紫の藤さく家に薄あかりして

初夏や慈符せしふる郷の昔をれもひ君なもふかな

出雲不二聖りさびたる朝雲に天馬走るとあこがれ給へ

(右碧雲湖邊の友天籟恭君に)

笛すざぶ牧童は君よ夏花のあかきは我と野に笑みし人

野にまろびわがふく笛のすすしさよ翹もつ子は花に癡  
に來よ

短歌募集課題

夏の海 東京 平野萬里選

一人十首以内他の投稿と用紙を區別して清記せ  
らるべし △締切八月三十一日 △本社編輯局宛

こは數分間 少くも數秒間 の事相なるべく、

ものいふにいらへしもせず笑もせぬ人と住ま  
ひぬ山に二とせ

こは二年間の現象を咏ひたるなり。讀者は直下明瞭な  
る印象を與へられむ。如斯く今の詩歌は時間を含まざ  
るもの太だ軀し、こは概して當面の題材選擇するに従  
ひて、美の量の増大せらるるが故に、及ぶべく葛藤の  
發展、結構の錯綜を圖れば也。

尙ほ一言の附加すべきは、夫の藝術を大別して、空間  
藝術時間藝術の二に分くるものは、こゝに云へると稍  
意義の異なるものある一事にあり。混同せざらんことを  
望む。

豊旗雲

河野翠 漱

西方の樂土れもへる佛  
弟子もひとつの罪はい  
なみたまははじ。

作歌談片 (三)

袖影

第六號よりつづく

客問ふて曰く

△時間詩とは何ぞや。

△そは名の示すが如く、時間を含める詩の謂なり。そ  
もく、諸藝術中、時間を含み得るものと、否らざるも  
のと、又兩者を兼ねるものとの三種あり。彫刻物の如  
き、繪畫の如きは、常に時間を示すこと能はざるもの  
に屬し、音樂の如きは、時の移るに従ひて漸やく明瞭  
なる感納に入る。詩——即ち和歌俳句等——は是

等時間空間の兩者を兼ね有するものにして、或は刹那  
の事相をも(繪畫の如くなる能はずと雖も)讀者に傳へ  
得べく、或は數時間乃至數年間の出來事といへども、  
此は容易すく顯現し得む也。

故に詩は、まことに諸藝術中最遍なるものといふべく  
、取材の範圍、廣く且つ自在にして、内界および外界  
、自然界精神界の萬物に涉る。

時間詩の例を擧ぐれば、川上櫻翠氏の、

山棲や月をし見れば海戀ひし海をし戀へば君  
はねばるに

山白は鳴かぬ日もあれ  
山あひの小野のつかさ  
に君おもふかな。

夏の月夜殿のゆめのい  
づかたに待ち得しもの  
かああほどとぎす

ゆるらかに足の音しの  
びに水にこえて白けし吹  
きぬはつ夏のかせ。

まよはしか妙香くゆり  
あけぼのの夢の氣うつ  
らせまるとれもふ。

やみがたき法悦かはた  
王冠のさづけか瞬時な  
みだながれぬ。

# 懸賞讀者募集

一雑誌の主義を普及せしめんには、先づ多くの讀者を得ざるべからず。讀者あり而して初めて雑誌は刷新せられ活動せらるべき。我社は其創立より一貫の主張に基づき、第十四號發行の盛運に到れりしを歡ぶと雖も。今や一段の飛躍を要する時となり。計畫する所亦甚しとせず。然れ共、讀者の數今の如くんば、今後に於ける本誌革新の程度も恐らくは從來の圏域を出でざらむ。是我社が頗ぶる遺憾とする所なり。依て爰に讀者募集の新案を設け、次號以下漸次本誌の改良を試みむとす。四方熱意の同志希くは輔けよ。

## 方

## 法

- 一 「銀鈴」半年分參拾錢以上前金拂込者には番號券壹枚を呈し同時に社友に列す
- 二 前項拂込者五名以上紹介者には五名毎に番號券壹枚を呈す
- 三 番號券は切手若くはハガキにて請求せられれば豫め各自の番號を知り置くことを得べし
- 四 申込期限は九月十日限とし十月の同誌上第十七號に當籤の番號を報告す
- 五 當籤者を定むるには松江市内發行松陽新報社若くは山陰新聞社の何れかに抽籤を囑托し之を決す
- 六 百五十番を以て一組とし一組毎に左の賞品を附す
  - 一等 國內發行の新報紙(数字新聞を除き) 一種 三ヶ月分
  - 二等 全 二ヶ月分
  - 三等 全 一ヶ月分
  - 四等 「太陽」 一冊
- 七 賞品は時宜により現金に換ふるとあるべし

明治三十九年 七月 日

石見國邑智郡田所村  
銀鈴社

責任者 河野翠  
菅原紅雨

## 簾障子

松田まつば

連翹や瀟洒めきたる八疊にかなりや飼へり末  
のいもうと

かたどきの夢とたもふと君いひぬ別るる夏の  
雨の或る日に

隣室のれもはれ人は午すぎをかたりぬ給ふ五  
月雨の宿

のそしらす菫蒲さるにも力なき病氣すなり近  
江の國に

ほどとぎす往きにし人の面影を扇に思ふ欄の  
利那よ

さみだれのしとく迫る窓にして君をむかへ  
ぬあわたしくも

藤本 晚花

一 笑子

木村 秋浦

ひたよする光の波のあふるべき期もあるらむ  
と闇も否まじ

夕靄は山瓶をまきぬ野をまきぬ吾ぞとけ行き  
て露と君まけ

春昔忘れな草と胸にして生ひぬそれより培ひ  
ければ

夕鐘や松葉牡丹の細道を雨乞つゞく眞憂の寺  
へ

君が魂我魂合ひて西方によるや水脈曳く眞闇  
の星の

淡靄は見返る君がみ姿をこめぬ相思のをはり  
はかくと

雨そそぐ薔薇と君がみ手とりて思ふと云ひし

菅原 紅雨

剌那のこゝろ

けんろ 険路なり幸なき我ら連れだちて歩むとすれば  
またも蹟く

新聞紙を讀む心得 (二)

李 村

△廣告欄を注意を拂ふことを要す、時代の出版物を知り、個人の出来事を觀底に想察し、以て常識を養はんは、亦極めて緊要なることに屬す  
△記者が自ら署名して公にせる雜報は、細心なる注意もて見るべし益する所あらむ  
△電報欄をのみ見て嬉しがる手合多し、こは固より好奇心に富める人々の本能なるべけれど、概してわ若い讀者と知れ  
△地方奇聞などを見て騒ぎ出す連中も、素人讀者の部類に入る  
△新聞紙讀む人の眼が、いかなる順序に紙面を駛するやを傍觀せば、たほよそ其人の人格を窺ひ得む

初夏晚春 千江選

◎十

ゆく春や緋の暮れたむ女官部屋 波舍  
行春や今日を七日の喪にこもる 紅山  
川舟に春つくる日を下りけり 崑泉  
従妹も來て一日陸じ暮の春 東岳  
腹中の吟塊春の名残かな 自來  
行春の杯くばる土産かな 東岳  
逼塞のこころ行く春觀じけり 自來  
京の春子取りの噂にくれにけり 東岳  
頼母子の放落しけり暮の春 東岳  
五月雨澮に大鮎あさりけり 東岳  
流れ出づる靈池の鯉や五月雨 波舍  
落人を渡す出水や時鳥 波舍  
筏組む河原つづきや時鳥 九菊  
五月雨や藪の中なる犬の息 崑泉  
旅に老いし女俳優や五月雨 崑泉  
五月雨や人僅かなる野邊送り 自休  
五月雨大なる鯉を得たりけり 自休  
明近き出城の空やほととぎす 露月

水馬會 (第三回) 富田五吞

△二十一点五吞△十六点九字△十五点二牛△十四点花人△十三点柳盡△十一點奇岳△十點紫△同点浮艸。  
六點 薰風や一尺の鮎膳にあり 五吞  
五點 講中の寄進に植うる寺田哉 全  
全 枇杷黄に酢倉の窓に迫りけり 芦仙  
全 雁行す田植の笠や雨斜 全  
全 草蒨の草に隠るる夏野哉 九宇  
四點 折りて行く野ばら萎るる夏野哉 黒潮  
全 唄もなく淋しき寺の田植かな 二牛  
三點 帚木の伏家は暮れてとぶ螢 花人  
全 螢見や棹の滴袖にちる 五吞  
全 星關の芦に風立つ螢かな 全  
全 里境の木標古りし夏野哉 芦仙  
全 風薫る長安に酒旗見ゆる哉 柳盡  
全 薰風や瀧に望みし谷の房 奇岳  
全 藪下や地藏に枇杷の落磔 以學

(以下畧)

蠟を引く部障子や五月雨 紅山  
雨はれて寺の灯やほととぎす 自來  
さみだるる中を濱越す荷舟哉 自來  
百韻の俳諧巻けり時鳥 南翠  
名も知らぬ大川端や時鳥 南翠  
閨中を下る船ありほととぎす 南翠

伯水會五句集 (能義郡井尻)

百合の花(互選結果)

四點 百合白し草に晴れ行く谷の露 五吞  
全 百合の花鳥横さまにとまり行く 石水  
三點 百合や宵雨晴れて草の月 五吞  
全 鬼百合の咲いて姫塚荒れにけり 雪の舎  
二點 百合や小雨降る夜を狐鳴く 二一  
全 鬼百合や草家を出づる裏戸日 富城  
全 百合白き草の中もく小蛇かな 笛聲  
全 夕風や小流清き百合の花 杉雨  
全 百合や野を守る神の花かざし 峰秋  
全 百合咲くや小牛の走る小芝山 峰秋

(以下畧)

夏

老杉古松宮取巻くや青風  
 薫風や宮司白馬に召したまふ  
 丸やく籠の家や桐の花  
 簾這ふ晝の螢や五月雨  
 五月雨の川を小桶の流れ覺  
 五月雨の隣に通ふ灯かな  
 衣更て美人の多き小村がな  
 白藤に小家の見えて茶の煙  
 草原に蛇鞭つや夏の月  
 花桐に雨吹き晴れて夏の月  
 琵琶亭に鯉の料理や夏の月(水滸傳)  
 こき戻る藻刈の舟や夏の月  
 田植すんで静かな門や夏の月  
 明け渡る鶴川の瀬々や夏の月

松葉  
春圃  
五香

つばくらはも花ちる里を戀ひぬるや高  
 萱そよと仲羽みなみへ 翠 激

文藝は此域に達して始めて眞に大なりといふべし。」  
 ●海老名彈正氏の「主婦の信仰」に曰く、「主婦は一つの確手たる信仰がなくてはならぬ即ち至誠を盡して教育する所の其心事は神の嘉し玉ふ所のもので、神が母の心に勝る所の恩恵を以て其子女を保育し主ふといふことを信仰せねばならぬ。かく神を信仰すると同時に、善良なる徳性を以て生れて来た子女を信認せねばならぬ。言を換へて申せば神を信する者は子女の徳性を信する人である。でかく子女を信する時には、其信認は必らず子女の赤心に貫くのである。それで親に信仰せらるる子女は自らも慎みて亦自から氣強く感ずるのであつて、喜んで親の志を服するやうになる。」と。  
 ●坂井傘水氏の「歳尾牛頭」中に曰く、「昨一年間(三十八年)の美術史を回顧すれば近年一般に進歩しつつありし趣味の普及は更らに著しく發展し來りしが如く、諸般の事物に應用せられて、圖案意匠の如き頗る需用を増加し、文學雜誌が繪畫を挿入するの風は、更らに進んで美術を主とする雜誌の發行を促しぬ、然れ共社會の藝術的要求の範圍は尙ほ極めて狹隘にして且つ極めて幼稚なることは搦ふべからず。」と。

寄せ柱

銀鈴社同人

〇十二

手帳に記されたるを一つ二つ。  
 ●「ニーチェに基ける女性論」の中に曰く「女は玩具なり。然り、純潔にして美麗なること、恰かも寶玉に比ぶべき玩具なり、未だ知られざる世界の徳操を以て輝ける寶玉を見すや。」と、又曰く「汝若し婦人の許に趣かば冀くば鞭を忘るること勿れ。」と。  
 ●島村抱月氏の「囚はれたる文藝」に曰く、「我等が眞に大なる文藝に於いて味ふ最後のものは言ひ難き一種の妙機なり。我れ之れを何とか説かん。譬へば讀下に、觀底に、鏗然曼然として音を成すが如き機微あるなり。魂愕くの境あるなり。事は一小部なれども、其の事直に全人間、否我が全經驗に響きわたたりて、人生運命なごいふものに今更の如く頭を回し來るの情禁じがたきの謂なり。哲理的より進んで、其上に悟入あるなり。神秘的より進んで、其奥に解決するなり。之れを宗教的といふ。要するに此くの如き主義にての宗教的とは、人生最後の命運に回顧するの情を刺戟するなり。文藝の奥に、廓落として廣大無邊の天地開け來るなり。」

編輯たより

▲本社同人 大屋桂水君は年來の宿志を達すべく去る六月中旬上阪されました。君にとりては、これが神の御手に導かれた理想のパラダイスに入る首途であるから以て大に賀すべきであるかも知れぬが、併しながら一面我が編輯局を顧れば少からぬ打撃を蒙つたのでまた、本誌のために悲まざるを得ない次第であります。我々はここに、君が既往における本誌に對しての多大なる熱心と勤勉とを謝すると共に、君が成功のほどを祈つて已まぬのであります。  
 ▲本誌募集の短歌は、別項の如く平野萬里氏の選を乞ふべく全氏の承諾を得ました。氏は「明星」「帝國文學」「藝苑」等に稿を寄せられる青年詩人でありまして、諸子が詠草に對しては、慎重に査閲せられることと信じます。  
 ▲次號投稿は七月末日限りべ切ります、いつも言ふことではあります、期日までには必ず原稿が到着するやう御發送を願ひます。(紅雨手記)



寄贈新刊

△若櫻。二ノ五、六、第六號に入りて内容や、精選せられたるものゝ如し。△若葉二ノ七、幽陰の「自ら機選を造れ」あり。歌俳は幼稚を免れず。△山鳩。三ノ七、薇山の評論あり。「文磔」及び「鳩吹」は全誌の呼物たるべし。山田葩夕といへる人の薫園を擔ぎ上げたるは見苦しかりき。△甲矢。二ノ十樂翁の「さつき」の卷「奇志の「菊根分」狐成岩の「ウツボ」等讀下の涼味を得べき乎、△小琴。十、戸澤姑射の「オセロ」阪井久良岐の「活字行列」草野柴二の「唱歌女」あり、賑かなり、四十八頁。△くら。三ノ十△曙聲。二ノ四、△菊見新誌。四九、△琵琶文壇。四ノ三、衛生談話。六ノ六。

本誌懸賞讀者募集締切期限短かりしに依り九月二十日まで延期す大好評續々申込ありこの際どしく應募せられたし

控帳

●十四

▼吉川弘文館其の發行に係る國史大辭典の申込者を新聞に廣告して多額の料金を拂ふこれ又廣告術の一法か  
▼本社に寄贈せらるる地方雜誌中東京のそれと比肩し得るもの甚し斯くて年々地方雜誌は忘れられむとする乎  
▼東京の新聞紙にして文學趣味に乏しきもの少く日々作物に雜報に盛んならんとす盛大の餘德亦慶すべき也  
▼奥原碧雲作「日本海大海戰」は小學兒童の爲めに物せし歌なれば嚴正なる文藝批判の上より見るべき値なし  
▼松江に文學士成田瀧川と云へるあり長詩に短詩に翻譯に蓋し地方の勇將か然れ其所謂赤門派也無能の標本  
▼松陽に須山慈齋といへる人の短詩チヨイ々々々散見すあれでも歌と名づくべきや惟ふに小學生徒なるべし  
▼新詩社の青年詩人中各冊を分ちて詩集の出版せらるべき計畫ありと我等は是等の好詩集が早く出でんを俟  
▼雜誌をたいで欲しがらるテアイは俳人に多し品性の陋なる見透かされて可笑し頭から敲きのみしてやる迄さ  
▼雜誌「東亞の光」で井上哲次郎博士大分弱つたらしい筆碌すればこんな赤恥までかくとか全株僕の嫌いな双

廣告

菊見新誌

明治 毎月一回發行。本誌 俳諧 前金七錢。半年分參 導場 八錢。一年分六拾 菊見 但郵祝共 菊見 雜誌は隔々たる門派に拘泥せず善く好風各家と 誌上に集ひ斯道を研究するの指南場でありませす 本誌は世已の定評ある如く營利的即ち金錢の爲めに發行するのではありません眞の道樂の寄合ひ組織てありませす 本會員たらんとするの上は見本科郵券七圓添ひ申込有たし會則及出草定規等は本誌に詳記してありませす

發行所 越後國 菊見會

社告

「銀鈴」誌代及び社費前金切の場合には封に赤イノキにて○印を附すべくに付直に御送金被下度前金切に對しては嚴に發送を見合はせ候。

繪葉書の交換を乞ふ

俳句又は短歌等を記されたし、直に他の繪葉書を以てお返しす可し 在滿洲騎兵第二十聯隊第二中隊 枯竹 内田正雄

懸葵

毎月一回 一日發行

▼懸葵は京都に於て發行せらるる日本派俳句雜誌にして徹徹徹尾京都趣味の發揮に枚む

第參卷第五號 (七月一日發行)

要目

△小説、時是れ金(四明譯)△筑紫の春、下(句佛)△ほととぎす(放逸樓)△募集句、蚊遣(句佛選)△お花さん(木母)△參宮はかき使(鱸江)△募集句、夏瘦(碧童選)△老鷲轉(小自在庵)△夏季雜吟△會報△裏繪夜振(吉田生)

▼定價一部金八錢、六部前金四拾五錢 十二部前金九拾錢

京都市松原通若上西入 北門前町

懸葵發行所

# 銀鈴社清規

- 一 文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たることを得べし。
- 一 社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す
- 一 社友は社内同人を経て本誌編輯の議に參與することを得
- 一 社友には有効期限毎月銀鈴を無代配送すべし
- 一 支部社友は本社直接の社友と同一の待遇を受くることを得べし

# 銀鈴定價表

| 定   | 價     | 郵   | 廣                                 |
|-----|-------|-----|-----------------------------------|
| 部   | 部     | 部   | 告                                 |
| 部   | 部     | 部   | 料                                 |
| 一部  | 金五錢   | 金五厘 | 一行五號活字二十四字詰貳拾錢<br>半頁貳圓<br>郵券代用一割増 |
| 六部  | 金參拾錢  |     |                                   |
| 十二部 | 金五拾五錢 |     |                                   |

## ▲各種の募集

- 一 和歌 一俳句 一美文
  - 一 小説 一評論文 一長詩
  - 一 小評 一小品文 一社友月旦
  - 一 文壇消息 一歌會句會の詠草
- 何れも毎月末日〆切。字詰二十四字。  
本社編輯局宛。秀逸なるものは社中同人の議を経て  
薄謝を贈ることあるへし。

明治三十九年七月二十五日印刷  
全 年七月二十七日發行

銀鈴第十四號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二  
編輯兼發行人 河野岩雄

全縣全郡川本村大字川本五百三十八番地  
印刷人 原八太郎

全縣全郡全村大字全五百三十八番地  
印刷所 邑智活版所

島根縣邑智郡田所村

發行所 取次所 銀鈴社

全 全 安達共榮堂  
古井圭山房  
山本芙蓉堂

銀鈴第十四號(毎月一回二十日發行)  
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可

明治三十九年七月二十七日發行